

ただし、小生は鯨飲暴食ではなく、酒を楽しむことに“こだわり”を持っているだけである。

ここで、日頃、思っている酒と気候と風土との関りを図に示すので、肴、歌、美人、失恋に思いを巡らせて頂ければ幸いです。俗に旨い日本酒の産地(焼酎、泡盛を含まない)は、平年の気温が11.0～14.1℃以内(温度差が23.7～24.8℃)、湿度73%以上、降水量1740mm以上となる(文献:理科年表、平成9年版)。この地域は、寒からず暑からず、水気が多い肌にしっとり潤いのある所、すなわち肌に張り艶のある美人(?)の産地となる。図の中で、3項目の1つでも欠ける産地を調べて見て下さい。日本酒の産地と言われる所が入っていないことに気付くでしょう。ただし、ここでは、水の良さが入っていないので、合掌

— 酒道人・浮浪雲 —

— 金沢工業大学 浦 憲親 —

シリーズ隠れた建築紹介 ～養浩館(旧御泉水屋敷)庭園～



福井市の中心部に在りながら、訪れにくいのが、名勝養浩館庭園である。すでに平成6年に第4回北陸建築文化賞(業績)も頂いており、昭和57年、国の名所に

指定された、建築物と庭園の復元整備されたものです。

戦災(昭和20年の空襲)震災(昭和23年福井大地震)に遭いながらも、庭園の石組・礎石を辿り、これが県立図書館松平文庫に保管されている、文政6年(1823年)に描かれた、絵図面『御泉水指図』に良く符号しており、庭園様式の変遷を見る上での重要なものとして復元されました。

ここで改めて沿革から見直そうと、文献を辿ると江戸時代福井藩主松平家の別邸であったこの庭園は、家臣の屋敷を取り潰して造られ、幾度の改修を繰り返されて整備されていき、書院建築と回遊式庭園によって江戸中期を代表する名園として、学術的にも高い評価を受けていたとのこと。

しかし、戦前(昭和初期)には、この辺りは小学校の他は果実園が広がっていたようで、ガキ大将のよき遊び場にて、塀の隙間より出入りし、池の魚を釣ったり、樹木の間にて、遊んだりした程の荒れ様だったとの事でした。それが戦後の復興都市計画により、さらに道路にとられたり、公共建築物が建てられたりして、庭園部分が削られていく状態でした。そこで国の指定を受けたのを契機に、昭和60年より調査を開始して、復元事業の第一歩が始まりました。

前述した絵図面『御泉水指図』に基づき、更に『文政六癸未歳九月吉日改正御泉水指図』の『覚』に資料の詳細な部分が記されており、これらを総合して検討され、文政期の様相を甦らせるようにしようと、屋根の茅葺・柿葺・土塗り壁のじゅらく壁・鋳金物・張壁・螺鈿細工等の工法を、伝統に基づいて復元に努めたそうです。

復元された庭園・建築物は現物を見て頂ければ、いかに忠実に再現されているかが解ります。ここで特筆される処は『覚』に柱寸法・小壁寸法・土庇柱寸法・縁高・縁幅寸

法・床の高さ・棚の深さ・天井の塗り竿縁等が詳細に書き込みされているとの事で、復元工事に大いに貢献しました。また、畳の寸法が、福井間(1間=6尺2寸)でなく、京間(1間=6尺3寸)である事が、遺構発掘より解り、この事は柱間の福井間への変遷にも話題を提供するものであり、庭園も回遊式であり、池に張り出している部分も、遺構発掘の結果、遺構をそのまま使用しその上に復元され、樹木の種類等も池底の発掘調査にて決定され、植樹されたとの事です。

学術的資料は、専門書にお任せしてと、私の気の向くまま気の付いたまま書きました。この位の事を頭の隅にでも入れておいて、気軽に訪れて鑑賞して頂ければ幸いです。

— 寺嶋建築事務所 寺嶋 邦夫 —

北陸支部インフォメーション

■桜町遺跡見学・講演会報告(富山支所)

6月27日の発掘現場見学会は、国道8号線の騒々しい車の往來を横に土砂降りの雨模様となった。「顔らしきものが彫り込まれた木柱が宗教的なモニュメントではないか」と当日の新聞記事があり、参加者の注目を集めていた。現場はぐもりと鋼矢板が張り巡らされており、そのモニュメンタルな木柱にも鋼(たぶん梁か足場を支えるためのもの)がまともに刺さっているのを見ると大変もったいなく思えた。かといってその矢板を設置しないと伏流水が湧き出て水浸しになるそうで、やむを得ないようである。その伏流水のおかげで、地中の遺物が水浸しの状態になり縄文時代から今日まで腐らずに残ったようだと推測され



ていると聞き感心した。また、近くの小矢部ふるさと歴史館では実際に発掘に携わっている方の説明で数々の遺物を見学した。桜町遺跡のマスコット「こごみちゃん」の発想もととなった遺物「こごみ」は最近野に生えていたこごみの真空パックが本物の代わりに展示されていたのだが、既に茶色く変色し(発見されたものは緑色をしていた)いかに泥の中の保存状態が良かったのかが伺われた。ふと、懐疑的に思っていた最近流行の泥エステの類が満更でもないのかなと、変なところで感心した。その後、木曾義仲ゆかりの植生護国八幡宮を職芸学院上野先生の説明のもと見学し、東京国立文化財研究所の宮本長二郎さんのスライドを交えた講演会では、一般の参加者も多く盛況であった。

(見学:37名、講演会:200名)

— 藤田石装(株) 藤田秀樹 —

日本建築学会北陸支部ニュース「AH!」第14号

発行日 1998年9月10日発行

発行 日本建築学会北陸支部広報部会
相田 幸一(新潟) 加藤 則子(富山)
長谷川兼一(長野) 後藤 正美(石川)
桜井 康宏(福井) 石川浩一郎(福井)

事務局 室田 文男・瀬口さゆり
〒920 金沢市玉川町15-1、パークサイドビル3F
TEL&FAX 076-220-5566

特集

建築界における男女の共生



支部ニュース「AH!」の第14号をお届けいたします。シリーズ「共生」の第4段として今回は、新潟支所で支所長を含む男女3名づつの皆さんに「建築界における男女共生」をテーマに語っていただきました。広報部会長としては、本誌第1号から第5号までのシリーズテーマが「女性と建築」であったことを思い出し、また一方では学生諸君の就職担当として悪戦苦闘が続く現状も思い起こしながら、「わが国の男女共生はまだまだ…」というのが率直な感想です。また、「目標喪失」とか「先行き不透明」とか言われる80年代からの混迷状態が続くわが国では、「共生」を語る前に「自立」を語るの方が先なのでは…という思いを新たにさせられました。ちなみに、平成7年版の国民生活白書には「夫が家事を手伝う国は男女の賃金格差が小さい」と題する興味ある図が掲載されており、社会における女性の自立と家庭における男性の自立が相関関係にあることが示されています。興味ある方は是非ともご確認ください。

建築界における男女共生

棟梁制に代表される封建的な男社会であった建築業界にも、NHKの朝ドラにも取り上げられているように、最近では多くの女性が進出してきました。

今回は「建築界における男女共生」をテーマにお話を伺いました。出席していただいた方々は、ゼネコンの経営者として早くから女性現場監督を養成してこられた和田正男さん、女性建築士の草分けとして苦勞されてきた橋本郁さん、設計業務を通して女性建築士を育てていらっしゃる加藤則夫さん、建築行政に携わっていらっしゃる佐山美弥子さん、就職3年目現場監督として奮闘していらっしゃる桶谷和代さんの5人の方々です。司会は川瀬新潟支所長が勤めました。

女性の登用

司会：本日はお忙しいなかお集まりいただきありがとうございます。今日の新潟支所の座談会は「共生シリーズ」の一環として「建築界における男女共生」をテーマにお話を伺おうと思います。

それでは年配の和田さん、今まで長く仕事をしてこられ、業界で女性と最初に出会ったのはいつ頃ですか？

和田：私の会社では昭和55年に初めて女性を採用したんですが、どのような位置づけをすればいいかという難しい問題がありました。経験が無いところに、施工業者ってのは図面だけ書いてよし、とするわけにはいけません。それで現場に出ることを採用の条件としました。結婚のマイナス面については採用する段階では考えないことにしました。それから18年になります彼女は一級建築士もちろん取ってますし、顧客の扱いがうまくて、会社にとって貴重な存在になっています。しかし、例えば5M以上の高所作業は女性は大めだよというような指摘があったり窮屈な面もありましたが、彼女自身普通の男と同じようにがんばってくれたと言う気がするんです。

司会：橋本さん。紹介では「女性建築士の草分け」と書いてあるんですが、今まで建築分野でいろんな仕事をしてこられましたよね。

橋本：私は大学では構造専攻で、卒業後は大手ゼネコンの構造設計に入りました。新潟地震の年で忙しく、入ってすぐに一棟任せられて、力がなく大変苦勞した記憶があります。入社して3年目に設計室が設計課に規模も含めて変わり、その時から女性は補助という立場でと言われ大変ショックでした。そんなこともあって会

社を出てしまいました。息長く仕事出来るようになりたいと悩み、一年間住宅デザインを学んだ後意匠設計に変わりました。そんな中でたまたま縁があって同業者と結婚しました。結婚して三年目に子どもが生まれましたので、取り敢えず子育てをする間は休もうと思いました。子育てをしながらその間は建築の中で自分は何をやれるかな？って模索の月日でした。そして男性があまり力の注がないところで仕事をしようと決意したんです。機会が有ってキッチンの相談をしながら住宅の増改築とか新築に対応する仕事につきましたが、朝、幼稚園に子どもを預け、帰りに受け取って、家へ帰って図面を書くという生活でした。こんなことまでする必要あるのかなあと思ったことも有りましたが、でもお客様に喜ばれるとそれも嬉しかったですね。

育児と仕事

司会：最近特に建築業界の分業化が進んできたでしょ。いわゆる下請け制度みたいなのは昔からあったんですけども、今のお話のキッチンのような部分での専門家がでてきたとかあるんじゃないでしょうか。

加藤：私が学校を卒業し設計の世界に入ったのは昭和48年ですが、その頃は我々設計者も男性で、ショールームに行ってもまた男性が対応する。でも、お客の所に行きますと奥さんと話をします。我々がプランを提案しても「実際の使い勝手が違うのよ」と言われますと我々では対応できない面がありました。我々よりも女性が行って打ち合わせした方がスムーズに流れるということはあるですね。先日もそば屋さんの設計依頼がありました。その店のターゲットはこれからは主婦だと言うんです。それで女性を担当者にしたんですけれど、女性の持つ独特の優しさが建物にも出て来るんですね。

加藤：先程橋本さんが会社で、女性は補助だって言われたことを話されましたが、言った人の気持ちが分かるような気がするんです。独身のうちは非常に一生懸命がんばってもらえる。一人前になってもらいたいと



座談風景



和田 正男さん



橋本 郁さん



加藤 則夫さん

いう気持ちで、こちらも一生懸命育てて、新潟で結婚してくれればいいんですけど、東京で結婚した場合どういふふうになるのか。あと子供が出来たらどうか。男でもきついのには女性が本当にやって行けるんだろうかという気持ちがあるんですよ。

橋本：男性と同じように仕事するのは当時は難しかったですね。ですから子供も躰っ子でした。かわいそうな思いもさせましたね。今私は、結婚をして仕事を休むことになってもなるべく早く復帰して、細々でもやめないで仕事することを提言しているんです。長期間休みましたら業界の変化も進んで自分の居場所が無くなる以



橋本さん 事務所にて

前に、復帰するのが恐怖になってきますよね。

加藤：佐山さんは子供を何人育てたの？

佐山：三人です。私は一つの課で12年いた時に三人子どもを産んで産前産後の休暇をいただきました。クビにもならず過ごせたのは、今の時代だったからなんだと感謝しています。周りの方に迷惑かけたし仕事もおろそかになった分、今は取り返さなきゃ、と思っています。今は多少子どもも大きくなって、残業も出来ますし、長い目で見てほしいですね。

加藤：女性に限らず仕事が出来れば出来るほど休まれると痛手が大きいんですよ。そうすると、女性だからとか男性だからと言うわけでなく、信頼関係がちょっとおかしくなるということもあると思うんです。やはり女性の場合の休む機会が多いというのは、どうしても使う側としては、常にそういう不安を持っています。

司会：そんなことを考えると産休は大事ですね。こうい

うことを乗り越えてきた人と、そこで専業主婦に変わっちゃう人というわけですね。でも、女性と男性を考えると、ある程度平等にできても、あるところからできないというのがあるかもしれない、そんな考えをしてもいいんじゃないですかね。

女性だからというフィルター

司会：佐山さん、行政の場合女性の立場というのは建築業界の他の分野に比べてやりやすいんじゃないかと思えますけど？

佐山：今、新潟市役所には女性の建築技師が4人いるんですけど、男性と同じように設計もやって外へも出て管理もしますので、他の会社の建設業の人たちと同じだと思います。さっき和田さんがこの世界は封建的だとおっしゃっていましたが、役所もそうです。役所だから特に古くて頭が固くてこうなのかなあて思ってたんですけど、建築業界というのは昔から全体にそういう所だったんだなあ、と、ちょっと安心しました。差別を受けるといったことはないんですけど、やっぱり女性は女性なんですね。男性を見る時はこの人も職員、何々さんも職員、でも女性は職員である前に「この人は女性」ということが上司の頭の中にあるようで、それがいい意味で配慮してくれてるのかも知れないけど、やはり女性にとってみると「女性だから」と見られてるんだなあてすごく感じることもあるんですよ。

司会：桶谷さんは物を作る仕事につきたいという強い希



佐山さん 市役所 自席にて



佐山美弥子さん



桶谷 和代さん



川瀬新湯支所長

望で現場に出て仕事されていますが、実際の現場はどうですか？

桶谷：うちは、同期の男性社員と扱いとしては変わらないんですが、やっぱり佐山さんと同じでどこかで女性として見られているなあと思います。例えば、検査官の方や発注者などへの説明の時には、おまえが先頭に立てと言われたことがあります。それは男性よりも暖かいイメージがあるからで、女性だからそれでもいいのかなと、そのまま受け止めていました。下請けの方も、監督としての女性が珍しいというので、男性社員よりは面倒見てくれる方が多いですね。

司会：佐山さん、こんな辛いことが、と言うような話はないですか？

佐山：最近はお茶汲みを女性にさせるのは止めようという事で、男性も当番制でやっています。でも、形だけそうやっているけど心の中は、変わってないのかなっていう気もするんです。一人の人間として見て、その上で女性っていうのが付いてくるのは当然のことだと思うんですけども、本当に一人の人間として見る前にとにかく女性が付いてくる、っていうのをすごく感じます。色づかいであれ設計であれ「さすが女性だね」って言われても、それは女性だからじゃなくて私の資質でこういうものが出来たんだ、それを誉めてほしいって思うんですけど。

加藤：例えば設計事務所の場合ですと、橋本さんのように自分でやられるとか、将来が想像できるんですけど、現場に出ておられる方はこの先やはり所長として人を使いながらやっていこうと考えているのか、それとも別な道に行く一つのステップとして考えているのか、ただ今は造ることそのものが楽しいからやってみたいという気持ちなのか、分からないですね。

桶谷：私はその人の意識次第だと思うんです。結婚して家庭を持つことは私にはまだ考えられないんですけど、家庭を持った場合に続けていけるかどうかという不安は確かに自分にもあると思います。続けて行けるような制度ができてくれば、あきらめないでやっていくことも出来ると思います。

橋本：サラリーマンの世界も変わってきてますよね。サ

ラリーマンであれば永久就職だという時代は終わって男性も女性も自分の能力の発揮できることを個別に考えて自分を売っていかなくちゃならない時代になったんだと思うんです。男の人だって当然定年が来るわけですから、第二の人生をどう歩むかは勤めている時にどう自分を磨いて、その後をどう生きるかという計画がなければ生きられないわけです。女性の場合はそれがちょっと早く来るんだと思えばいいと思います。自分の個性をどういうふうに出していかを常々考えておくことは男女とも必要でしょう。

加藤：最近私の下で働いている女性のやり方を見てますと、仕事に対する捉え方がちょっと違うような気がするんです。最近の若い女性は男だ女だということ意識しないで入ってきているなあという気がします。昔は女性が女性として意識して、その結果両極端に分かれていたんですね。女性であることを全面的にだす人と男に負けまいとの競争心でやってきた人がいるような気がします。

橋本：女性が大勢の中に一人入ってきたとき、この人がいる価値がある程度認識されないと潰されていくことがあると思うんですよ。だから、男に勝たなくっちゃという気持ちはあると思うんですよ。あったと思います。でも、それが今の方は自然に出来ている、そういう時代になったと思うんですね。

司会：建築業界って言うのは広いと思うんです。現場だけではないですから。女性の技術者は花じゃいけないと思うんです。お花になったんじゃお花が枯れる頃にどこか嫁に行っちゃいますから。そうじゃなくて、これからの女性技術者にも長く働いてもらいたいし、技術の蓄積をしていって欲しいと願っています。昔の先駆者は目標、すなわち星であったと思います。星があるから星を目指して、また新しいの星になったりするんじゃないかなあ。そういう星がたくさん出来てくる、女性にとっても進む道がどんどん開かれていく、そんなふうになって欲しいと思っています。

本日はありがとうございました。

(1998年7月29日収録)

感動することと驚くこと



日本は地質、天気条件が悪いので、山崩れ、水害、火災、台風等問題が深刻であると思いま

す。特に地震が多いため、防災施設の設置などかなりの対策を施さなければならないので、費用負担が大きいと思います。留学生活が一年を経た今、以上のような深刻なイメージを感じています。国が美しく、暮らしが豊かなのは、日本人は本当によくがんばり、まじめであることによると思います。このことから日本の国税が高いことも分かりやすいと思います。

ある日、テレビを見た途端、突然地震情報が放送され、詳しい地図と地域別の震度がテレビの画面に映され、アナウンサーは繰り返して「危険はなし」と説明した。こんな素晴らしい観察状況で地震を速く計測することの背景には、「命が第一」ということがあるのでしよう。

約10年前から、中国では高速道路の建設が始められたが、当時も現在においても高速道路の研究は少ない。福井大学の交通計画研究室に入ったとき、研究テーマを見たらびっくりしました。高速道路ネットワークの評価、高速道路周辺景観の整備、災害時における道路網の信頼性の評価などの研究です。都市毎、町毎のOD表もあります。詳細な調査と深い研究の両方もあります。

また、私は私費留学生ですから、お金はないため、アルバイトをしなければなりません、この面について、先生は良く理解して下さいました。ときどき私を含む留学生達を連れ、食事を招待していただきました。スーツやお土産もいただきました。私の研究テーマは観光地交通に関する研究ですが、先生は私が来る前から観光交通に関する本、論文集等を前もって用意していただきました。

—福井大学環境設計工学専攻 周 永広

オリンピックで感じたこと

98年2月開催された長野オリンピックは過去最大の参加国、参加人員で今世紀最大のウインタースポーツイベントとなりました。当初は何故長野で開催するの？、本当に世界中の人たちが集まるの？と言った県民の戸惑いも一部にはありましたが、無事終了することが出来たようです。

オリンピックでボランティアや交流活動の輪も広がりましたが、特にこういった集まりによく利用される施設の公民館等について仕事からお邪魔したときに感じたことがあります。

すなわち、1. 皆さんの税金で建てられているのに、2. 長持ちせず、3. 各住民のクラブハウスの施設として機能しているか？、また、4. その時のその地域の季節が感じられるような施設とは言えないのではありませんか。

これは何を意味するのかは皆さんすでにお分かりだと思いますが、国や県、市の基準があり、曖昧模様にさまざまな地域基準はあくまで切り捨てなければ成り立たないのは私でも理解できるのですが、地域の施設だからこそ伝統、地域に根差した建築が出来ないものでしょうか？

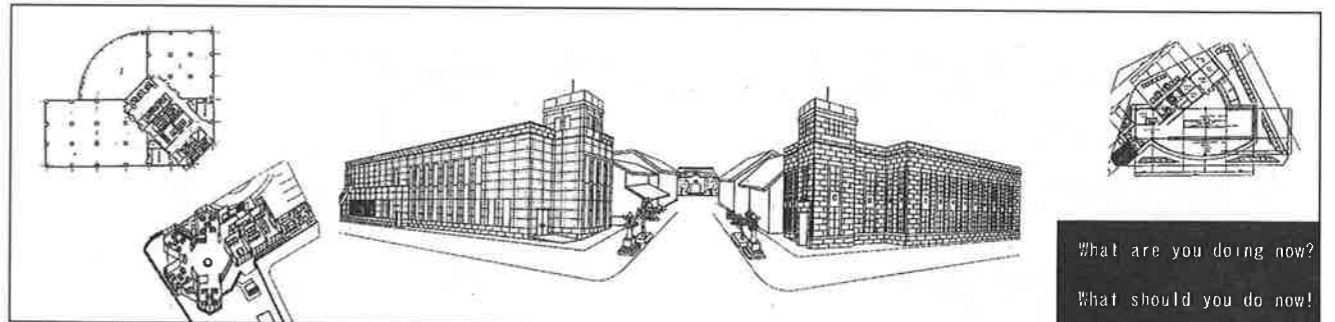
伝統を感じさせると共に堅牢な外観、子供たちがいたずらしてもびくともせず、高齢者にも暖かい印象の木製品を利用した会議専用室、環境に対する負荷の少ないエネルギーを利用して計画された設備、空調など。

せっかく長野の知名度が世界的にアップしたところですが、世界的なイベントが開催できるビッグハットやコンベンションホールだけでなく、公民館など地域の建物も長野らしいと認めてもらえるようになればと思います。

—長野ピーエス(株) 細川高夫



神長官守矢資料館



What are you doing now?

What should you do now!

〈庭園〉は21世紀のキーワード



国土の創造「庭園の島」
 国土庭園化構想をご存知か。日本を美しい「庭園の島」にしようという21世紀の国土プラン(第五次全国総合開発計画:国土庁1998)である。今までのまちづくりでは日本のよさを消失してしまうとの危機感もあって、日本独特の庭園思想を国土建設に導入しようとの試みは新たな生活様式の形成までも見据えた点で画期的な事柄である。

今まで、庭園は個人趣味的で箱庭、技巧すぎて第一閉鎖的でとてもまちづくりに応用できないと言われてきた。しかし、昨今の研究成果は庭園思想の持つ有益性を各方面で実証しつつあり、その成果をいち早く国土づくりの土台にしようとの思想は斬新でユニークだ。

庭園は文化空間

さて、新潟は問わずと知れた米どころ。豪農が稲作経済を基盤に百姓文化を育んできた土地柄である。しかし、その過程で、派手ではないが大小多彩な庭園が気候や地形を活かしながら、人智を凝らして造られてきたことは意外と知られていない。これらの庭園を時代史、生活史を色濃く刻印した秩序世界の新潟版モデルとみれば、まさに地域の貴重な社会ストックであり、身近でしかも、これほど歴史と風土を伝える文化空間もほかに少ない。しかし、残念なことに新潟に住む我々自身がそのすばらしさに気づかず、「新潟らしさ」がギッシリ詰った固有の空間を継承しないでいる。

庭園は「人間にとって一番近い安定環境で、しかも、さまざまな心理的欲求に対応し、多種多様な生命が生まれ、育つ空間=ピオトープ。さらに必要最小限の機能に美をプラスしてそれ自身が美しく、人間と自然との関わり方を教える環境は現代の公園(パーク)を大きく上回る。」といったら少々ほめすぎか。前述の「庭園の島」構想も、実はこの歴史、風土、文化が重なる地方地域の庭園文化の知恵が下敷きになっている。

21世紀に向けて

現代社会は過渡期を迎え、いろんなことが複雑に交錯した時代でアンバランス感だけが増幅されて何かピツリ来ない。だからこそ、これから社会が成熟する過程でもう一度自分にあった環境、気慣れた普段着の空間の良さを自分のものにしたと思う。戦後50年を経て、ようやく日本のアイデンティティの確立を目指した(21世紀のグランドデザイン)の発想を身近な庭園の中に見出した識者に大いに敬意を表したい。

一(株)要松園コーポレーション 土沼隆雄

井波寺大工から井波彫刻へ

朝霧が朝日にうち消され、徐々に富山県指定文化財瑞泉寺山門が姿を現す。

今もかろうじて門前町の雰囲気を保っているまちなみがある。この町の風物詩である彫刻のノミの音がトーン、トーン、とあちこちの辻から徐々に聞こえてくる。この風景、町の音は当然のごとく自然に繰り返されている。

井波町は1390年(約600年前)に本願寺五世しゃく如上人の創造による瑞泉寺の門前町として発達した町である。その瑞泉寺を建立するにあたって拝領寺大工が虹梁・木鼻・たばさみ等を彫り、のちにその技法が分化発生して井波彫刻の源流となり、その技術・技法は時代に沿って継承され、獅子頭・天神様・欄間・工芸作品と様々な作品が300余名の彫刻師に依って其の名を広めている。

一方、拝領寺大工が残した主流である井波大工はどうか。



高度成長時代に若者はホワイトカラーに憧れ3Kと呼ばれた大工に成りたがらず、追い打ちをかけるように工業化住宅が量産されるようになり、弟子と呼ばれる大工見習いが全く来なくなった。現在その数百名前後といわれ、特に40歳以下の大工が非常に少なく5分の1程度である。この現象は井波だけでなく全国的に言えることだ。大工でない人達がこの危機感を脱しようと大工養成学校を開校したり、メーカーは大工とはほど遠い養成学校を創り次世代の棟梁を育てようと取り組んでいるようだが、問題の解決になっているのだろうか。彫刻師の友人に井波彫刻の現状について聞いた。「毎年10名程の新入り弟子が全国の高校・大学を卒業して井波にやってくる。その受け皿である親方は組合で決められ新入り弟子は親方を選べない。そして親方に技術を学びながら井波木彫刻工芸高等職業訓練校に入学し彫刻の基礎を学ぶ。宿舎は親方の自宅を間借りし5年間修行する。その間月5万円の給料でやっていかなければならない」という。拝領寺大工から始まった井波彫刻が職人の世界を200年間守り続け、時代の新しい考え方や技術を急がずゆっくりと取り入れ決して妥協することなく厳しい徒弟制度の中で技術が継承されているのだが、残念ながら井波大工の世界では30年前にこの制度は無くなった聞いている。瑞泉寺山門前でノミの音を聞き、最近現場で聞かなくなった大工のノミの音を想像し、井波大工の将来がどうなっていくのか考え込んでしまった。

一(有)建築倶楽部 藤井一彦

インターネットを使う

建築におけるコンピュータの利用は以前は一般的なものになっていました。私の身近を考えてみると、構造部門では、昭和56年(1981年)の新耐震設計への移行により数多くの計算が手計算からコンピュータによる計算へと大きく変わっていきました。また、一貫構造設計プログラム(評定プログラム)の登場によりコンピュータの普及が大きいのびたといっても過言ではないかもしれません。現在、性能規定による設計への移行が現実のものとなってきており、詳細な解析モデルにおける振動解析や増分解析のさらなる導入が進むものと思われる。設計部門においても、製図台からCAD(コンピュータによる設計支援システム)への移行は目覚ましく、データの互換性も充分とられながらも、それぞれの専門への特化したCADシステムが現在でも数多く開発されています。このようにコンピュータが普及した要因は、上記とは別にシステムの価格が安くなったということ、インターネットの普及ということもいえるのかもしれませんが。

ここ数年、インターネットがいろいろな面で注目を浴びるようになってきています。インターネットに関する技術の発達は目覚ましいものがあり、電子メールやWWW、FTPにより容易に情報を入手することでその恩恵を受けているのかもしれませんが。日本建築学会でもホームページ(<http://www.aij.or.jp/aijhomej.htm>)を公開しており、数多くの情報が提供されています。建築関連サーバー(http://www.aij.or.jp/jpn/server/index_s.htm)は、多くのURLが登録されているので、ここからも建築の情報を得ることができます。インターネットでは検索ツール等を使うことによって、関連するキーワードを入力するだけで種々の情報を簡単に入手することもできます。

地震のデータは、UCB <ftp://nisee.ce.berkeley.edu/pub/a.k.chopra/elcentro.zip>などで公開されているにすぎなかったのですが、いまでは防災科学技術研究所 強震ネット(<http://www.k-net.bosai.go.jp>)により国内の地震観測点での地震波データも入手できるようになりました。この強震ネット(K-NET)は、気象庁の観測点(25Km四方に一箇所)の地震情報を公開しているため振動解析の参考データとして利用することも可能になりました。

構造関係の文献のURLを下記に示しますが、以前では英文の書籍やレポートに関する情報はなかなか入手することができませんでした。現在ではほとんどがホームページから容易に入手することができます。

- AIJ : 社団法人 日本建築学会(出版案内) <http://www.aij.or.jp/scripts/publish/publish.htm>
- BCJ : 財団法人 日本建築センター(書籍案内) <http://www.globe.or.jp/bcj/src/tosyo.html>
- BRI : 建築研究所(建築研究資料・建築研究報告) <http://www.kenken.go.jp/kenken/01home/index3.html>
- ASCE : American Society of Civil Engineers <http://www.pubs.asce.org>
- NISEE : National Information Service for Earthquake Engineering (EERC) <http://www.eerc.berkeley.edu>

ちょっと古い本ですが、建築関係のURLをまとめてあるので紹介しておきます。
 書名 : 建築・土木・環境・まちづくり インターネットアドレスブック
 出版社 : 学芸出版社
 発行日 : 1996年9月1日
 価格 : 2000円
 コード : ISDN 4-7615-2156-2 C0052

このように情報を容易に得ることができるということがインターネットの利点でもあるのですが、実際インターネットでいちばん使っているのは電子メールかもしれません。

一自営 三谷 創

“酒は人生の師”である。小生は、価格・製造方法に関りなく日本での酒にしか絶対に合わない言葉だと思っている。“酒”については、古来より百薬の長、気違い水などと様々な使われ方があり、誰もが酒は青春の「さてつ」である。

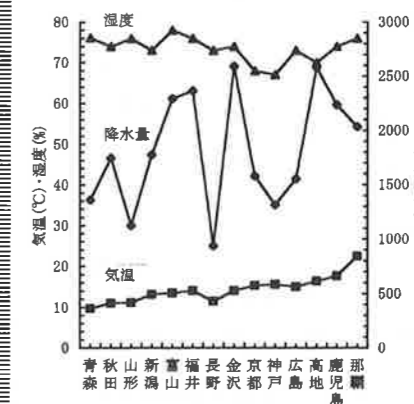
AHの原稿、北陸の酒について書けば良いとのこと依頼を受けました。しかし、酒の種類は各県で50種類前後もあり、飲み切るには大変な時間と体力、気力を要するのでここでは自分なりの酒、日本酒の考えにしたい。

酒は好きで和(日本酒、泡盛、焼酎)、洋(ビール、ウィスキー、ワイン)、中(紹興酒(老酒))を問わないが、飲む量は少ない。しかし、最近では、宣伝と銘柄だけを頼り、自己の舌、鼻、目を大切にしない酒に対して優しくない人が多いような気がする。それでも、酒に四季の移りゆくことが感じられるのは、日本酒の特権と考えている。少なくとも、常温、生、冷、燗、氷入りと多種の味を堪能できる酒は、日本酒においてしかないと考えている。

美味しい旨いは、人それぞれの個性があるので決めつけられないが、旨いのは値段の高い吟醸、大吟醸が当然で何の不思議もない。価格は高くても1升1500円以内と考え、探しているが行き着いていない。肴との相性であるが、これは場所によっても異なる。野では目刺が、室では烏賊か貝の刺身と漬物がいい。漬物は、自家製無着色の白菜か沢庵で、次いで地域特産品なら何でも良い。小生の酒はこの程度である。

雰囲気はTVのある店を避けるようにしている。料理人が番組に気が行けばろくなことが出来ないと思うし、食べる方も雑になるものである。ただ、残念なのは、そんな店が多く、網暖簾を分けてつまらない野球TVとドライビールでは飲む気もしくくなる。最近、何処もドライビールで、嗜好品まで押しつけるなど言いたい。酒は、湯飲みに合うのが最高だと思っている。また、歌は演歌か民謡で、前者は美人の女性なら何でもよく、後者は南部牛追歌である。

暖かい地方の酒は、泡盛で子供の名前が一字ある“紺碧”が好きで、お湯割りにすると飲みやすく、日本酒と同じく大変に



酒の産地と気候との関係

好きな酒である。焼酎は味が分らないから何でも飲む。洋酒は味・香などが値段に比例するようなので、酒をこよなく愛する酒道人には合わない。

長々と書いてきたが、書くことが無かったのかもかもしれない。ただ、お酒に合ったのは牡蠣に生酒の大江山(珠洲市内浦町松波)が最高で味・香りなど全てにおいて忘れることができない。大江山は、宗玄と同じ能登の銘酒と自我自賛している。

Pocket Monsters

アニメやゲームより「ピカチュウ」が有名になったけど151匹で「ポケモン」なんだから僕らのことも、知ってほしいよ

(富山女子短期大学生活学科2年・川口智子)

自然 人は生かされている 空・緑・水

ときを過ごす 心のゆとり

創る 人にとって大切なもの...

家 安らぎ・絆の家

(新潟工科大学総合建築工学科2年・丸山和史)